

病害虫発生予察情報予報第 6 号（10 月の予報）

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
水稻 (普通期)	トビイロウンカ	並	
	1. トビイロウンカ 今後も気温が高くウンカ類の発生に好適な気象予報であることから、圃場ごとの発生状況をよく観察し、発生が多い場合は早急に薬剤防除を実施する。		
大豆	ハスモンヨトウ	やや多	
	カメムシ類	多	
	1. カメムシ類 本年はカメムシ類の発生が多い。被害を防ぐため、圃場ごとの発生状況や大豆の生育状況を確認し、莢の伸長初期～子実肥大中期に防除を徹底する。発生が多い圃場では、7～10日間隔で2～3回防除を行う。		
	2. ハスモンヨトウ 圃場ごとの発生状況をよく確認し、白変葉が増加している場合や、幼虫の寄生が多いまたは加害が続いている場合は追加防除を実施する。		
イチゴ (本圃)	うどんこ病	やや少	
	ハダニ類	並	
	アブラムシ類	やや多	
	1. 炭疽病 天井ビニル被覆時まで本病に対する薬剤防除を継続する。台風等の強風雨により急激に発病が増えるおそれがあるため、長雨や台風襲来が予想される場合には、必ず予防散布を行う。		
	2. 次年産親株の病害対策 次年産での炭疽病の発生を抑えるため、健全親株を確保する。特に、育苗期に発生が認められた圃場では、優良原種苗等への更新を行う。		
キュウリ	べと病	やや多	
	うどんこ病	並	
	褐斑病	多	
	アザミウマ類	多	
	コナジラミ類	多	

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)	
	1. ミナミキイロアザミウマ：黄化えそ病、タバココナジラミ：退緑黄化病 アザミウマ類、コナジラミ類ともに発生量が平年より多く、今後、ウイルス病罹病株の増加が懸念される。ウイルス病の症状が見られる株は速やかに抜き取り、圃場外に持ち出して適切に処分するとともに、媒介虫の薬剤防除を徹底する。ウイルス病未発生圃場においても、媒介虫の侵入防止対策を徹底するとともに、定期的に薬剤防除を実施する。 2. 褐斑病 栽培初期から発生が多く、今後の発病増加が懸念される。ハウス内の換気を十分にいき、本病の感染に好適な高温多湿条件を避けるとともに、少発生のうちから定期的な薬剤防除を実施する。			
アスパラガス	茎枯病	並		褐斑病
	褐斑病	並		
	斑点病	並		
	アザミウマ類	やや少		
	ハダニ類	やや多		
	1. 次作に向けた対策 病虫害による早期落葉と次作への持ち越しを防止するため、収穫終了後も定期的に防除を行い、病原菌および害虫密度の抑制に努める。 2. 薬剤散布時の注意点 茎葉が繁茂すると薬剤が茎葉内部や株元まで到達しにくいので、不要な茎葉は整理する。またかけムラが生じるのを防ぐため、株外側からの散布に加え、ノズルを株内に差し込み散布したり、株の両側から散布するなど、十分な薬量で丁寧に散布する。			
タマネギ	1. べと病 苗床での感染を防ぐため、育苗期から予防防除を行う。			
野菜共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、 オオタバコガ シロイチモジヨトウ)	やや多		ハスモンヨトウ
果樹全般	果樹カメムシ類	多		ツヤアオカメム
	1. 果樹カメムシ類 令和7年9月11日付け病虫害発生予察注意報第2号参照			
カンキツ	ミカンハダニ	多		
	チャノキイロアザミウマ	並		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
	1. ミカンハダニ 発生が多い園では薬剤散布を徹底する。貯蔵する品種では、ミカンハダニが寄生した果実を貯蔵庫内に持ち込むと、貯蔵庫内で増殖して被害を受けるため収穫前の薬剤散布を徹底する。 2. 果実腐敗対策 日焼け果や裂果は、果実腐敗の原因となるので、収穫時に取り除き処分する。なお、黒点病の発生が多い園の果実は軸腐病を発病しやすいので、発病の少ない園の果実とは区分して収穫・貯蔵する。 また、降雨時・結露時の収穫は避けるとともに、果実に傷をつけないよう丁寧に扱う。腐敗防止の薬剤は、収穫 7～10 日前に、霧状になるノズルを使って果実表面にムラがないように散布する。 3. かいよう病 台風の襲来等強風雨が予想される場合は、襲来 7 日前～前日までに必ず薬剤散布を行う。また、罹病しやすい品種では、感染防止のため園内の発病葉および発病果実を切除し、埋却または園外に持ち出し処分する。 4. ミカンサビダニ 園内及び周辺の園で新たな被害を認めた場合は、早急に薬剤を散布する。特に、前年に被害が多発した園や放任園等に隣接する園では防除を徹底する。		
ナシ	1. 黒星病、炭疽病 翌年の伝染源を減らすため、収穫終了後の防除を徹底する。落葉した罹病葉は本病の伝染源となるので、埋却または園外に持ち出し処分する。		
ブドウ	1. ベと病 本病による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のため、収穫終了後の防除を徹底する。落葉した葉は本病の伝染源となるので、埋却または園外に持ち出し処分する。		
キウイフルーツ	1. かいよう病 収穫期頃から、本病菌の生育に好適な気温となる。感染を防止するため発病の有無にかかわらず全ての園において、収穫終了直後から銅水和剤を定期的に散布する。		
キク	白さび病	並	 クロゲハナアザミウマ
	アザミウマ類	多	
	アブラムシ類	やや多	
	ハダニ類	やや多	
	ハモグリバエ類	やや多	
	チョウ目害虫	並	
1. アザミウマ類 一部圃場で発生を認めている。圃場ごとの発生状況をよく確認し、低密度からの防除を徹底する。			

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害総合防除計画」も参照してください。

病虫害総合防除計画掲載アドレス

https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji003101844/index.html

QRコード→



Ⅱ. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「佐賀県病害虫総合防除計画」をご参照ください（3 ページの注釈にリンクがあります）。

写真

- 1～3 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。

10 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 10 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 7 年 9 月 25 日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年よりやや多い」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%) 及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 10 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	10	10 (19.1℃)	80	高い
降水量	20	40 (90.1 mm)	40	やや多い

Ⅲ. 10月の予報

水稻（普通期）

定期調査：43 圃場（5 圃場収穫済）

調査日：9月19～24日

[【概要に戻る】](#)

1. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生状況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 2.6%（平年 13.1%、前年 0.3%）

平年比：やや少（－～±）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈＋〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 今後も気温が高くウンカ類の発生に好適な気象予報となっていることから、圃場ごとの発生状況をよく観察し、発生が多い場合は早急に薬剤防除を実施する。

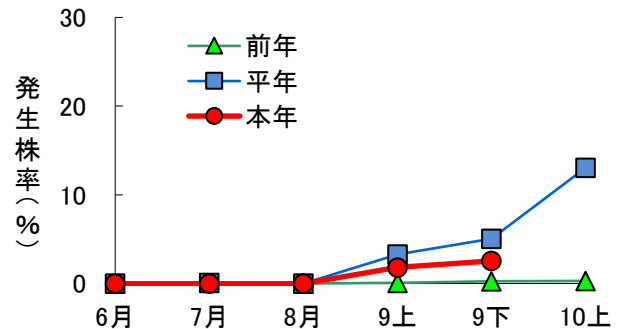


図1 普通期水稻でのトビイロウンカの発生推移

大豆

定期調査：22 圃場

調査日：9月19～24日

[【概要に戻る】](#)

1. ハスモンヨトウ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 1.8%（平年 5.8%、前年 13.1%）

平年比：やや少（－～±）

白変葉発生株率 0.4%（平年 1.1%、前年 2.4%）

平年比：やや少（－～±）

② トラップ調査（図2参照）

平年比：並（±）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈＋〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 圃場ごとの発生状況をよく確認し、白変葉が増加している場合や、幼虫の寄生が多いまたは加害が続いている場合は追加防除を実施する。

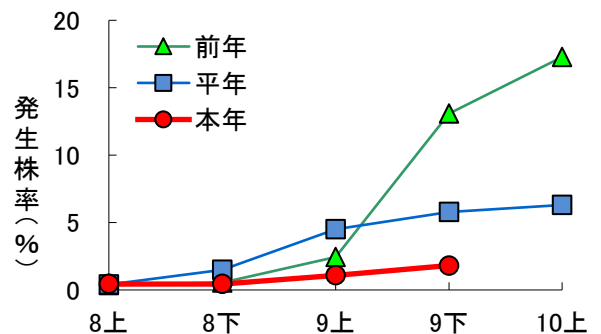


図1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

(2) 防除の際は、薬剤のかけむらがらないよう規定の範囲で十分量を散布する。

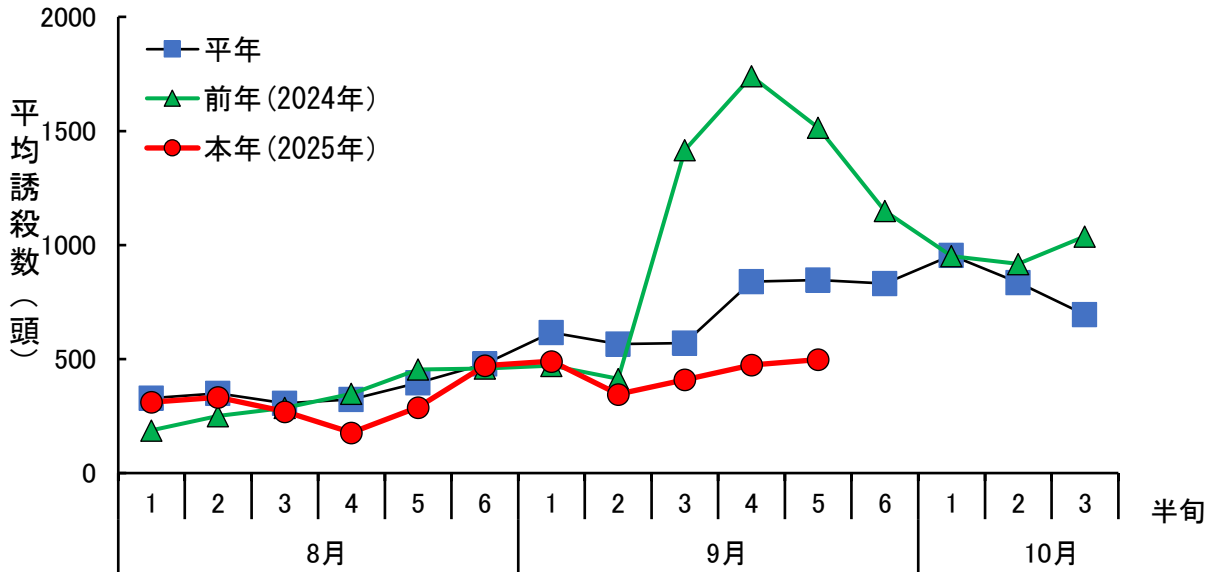


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
(農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数)

2. カメムシ類 (アオカメムシ, 仔モンゾカメムシ, ホリカメムシ, ミミアカメムシ等)

1) 予報の内容

発生量: 平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率 0.6% (平年 0.2%、前年 0.1%)

平年比: 多 (+)

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除にあたっては、薬剤が莢によくかかるように散布する。

(2) 被害を防ぐため、圃場ごとの発生状況や大豆の生育状況を確認し、莢の伸長初期～子実肥大中期に防除を徹底する。発生が多い圃場では、7～10日間隔で2～3回防除を行う。

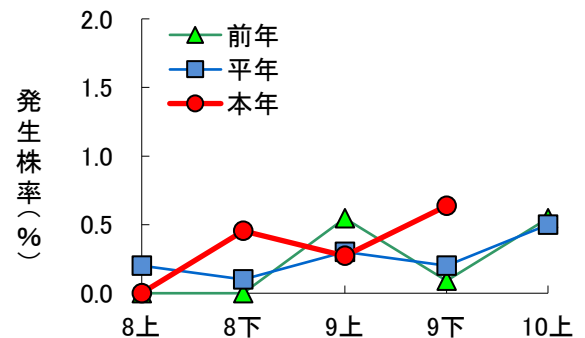


図1 大豆でのカメムシ類の発生推移

イチゴ (本圃)

定期調査 9 圃場、防除員 6 圃場

調査日: 9月19～24日

[【概要に戻る】](#)

1. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年 0.7%、前年 0%)

平年比：やや少 (一～土)

(2) 10月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件 (土～十)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 果実での発生を防ぐため、頂果房開花前までの防除を徹底する。

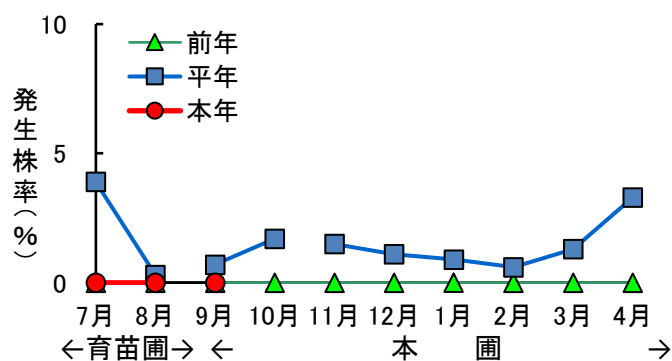


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0.5% (平年 5.9%、前年 2.7%)

平年比：やや少 (一～土)

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件 (十)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。

(2) 天敵(カブリダニ類)を利用する圃場では、天敵への影響が少ない薬剤を用いてハダニの密度を0頭レベルに抑えた後に、天敵を放飼する。

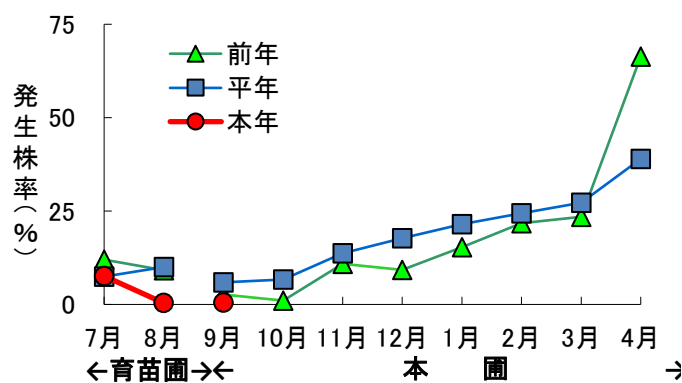


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

3. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：2.5% (平年 3.7%、前年 2.1%)

平年比：並 (土)

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件 (十)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場周辺の雑草は本虫の発生源となるため、除草を行う。

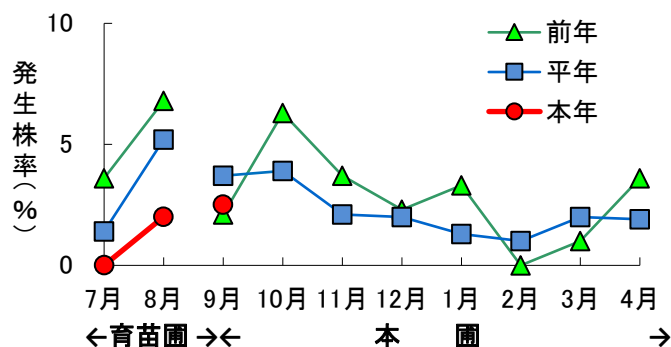


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

キュウリ

定期調査5圃場、防除員4圃場
調査日：9月19～24日

[【概要に戻る】](#)

1. ベと病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：2.2%（平年4.0%、前年0%）
平年比：並（±）
 - ② 10月の気象予報
降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 適正な湿度管理に努める。

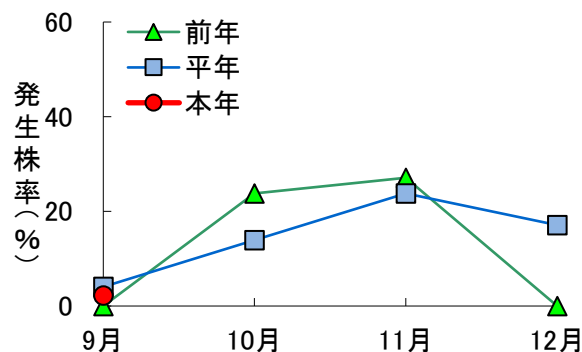


図1 キュウリベと病の発生推移

2. 褐斑病

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：44.4%（平年1.1%、前年0%）
平年比：多（+）
 - ② 10月の気象予報
気温が高く、降水量がやや多く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) ハウスの換気を十分に行い、灌水過多を避ける。
 - (2) 発病が多くなってからでは防除が困難となるので、少発生のうちから定期的に薬剤防除を行う。

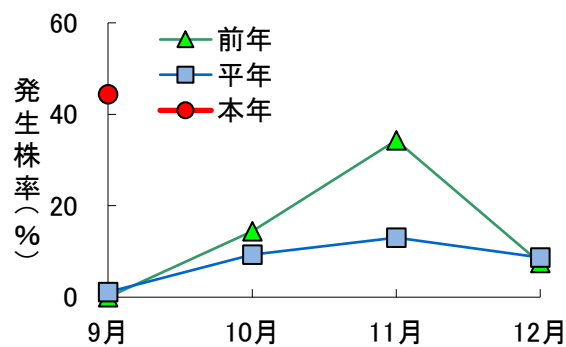


図1 キュウリ褐斑病の発生推移

3. アザミウマ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：9.4%（平年1.4%、前年1.9%）
平年比：多（+）
 - ② 10月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項

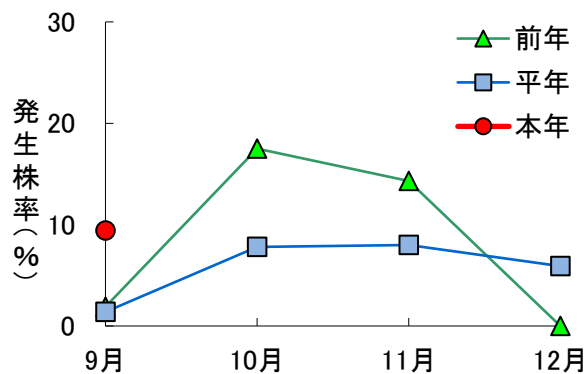


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

- (1) 黄化えそ病の症状（新葉の黄化・葉脈透過、葉のモザイク・えそ斑点等）が見られる株は速やかに抜き取り、圃場外に持ち出して適切に処分するとともに、アザミウマ類の薬剤防除を徹底する。
- (2) 黄化えそ病が未発生圃場においても、アザミウマ類の侵入防止対策を徹底するとともに、定期的に薬剤防除を実施する。

4. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

発生株率：38.9%（平年 11.2%、前年 5.6%）

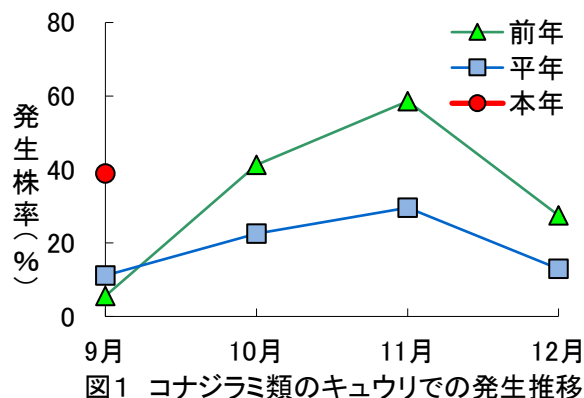
平年比：多〈+〉

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 退緑黄化病の症状（葉脈間退緑、葉のモザイク等）が見られる株は速やかに抜き取り、圃場外に持ち出して適切に処分するとともに、コナジラミ類の薬剤防除を徹底する。
- (2) 退緑黄化病が未発生圃場においても、コナジラミ類の侵入防止対策を徹底するとともに、定期的に薬剤防除を実施する。



アスパラガス

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8 圃場

調査日：9月18日～24日

1. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

発生株率：39.4%（平年 51.0%、前年 14.4%）

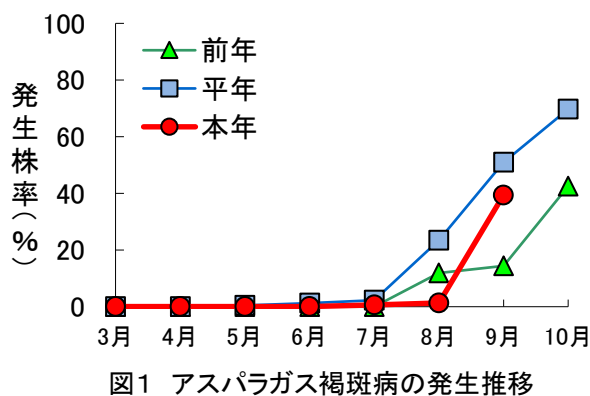
平年比：やや少〈-〜±〉

(2) 10月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±〜+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 通風を図るため、降雨時以外は原則として施設開口部を開放する。
- (2) 感染してから発病までの潜伏期間が20～30日と長いことから、発病前からの3週間間隔を目安とした予防散布を基本とする。なお、既発生ほ場及び降雨日が続く場合は散布間隔を短縮する。



2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

発生株率：1.9%（平年 1.3%、前年 0%）

平年比：並（±）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発生すると防除が困難となるため、虫見板への払落し等により、発生状況を確認し、寄生が認められれば直ちに薬剤防除を行う。

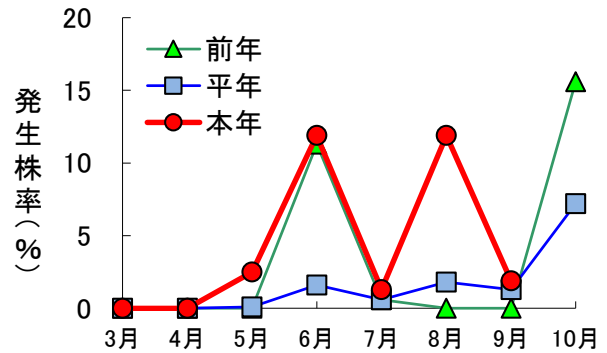


図1 アスパラガスでのハダニ類の発生推移

野菜共通

[【概要に戻る】](#)

1. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1, 2 参照）

作物名	食害株率 (%)	平年比	平年値 (%)	前年値 (%)
イチゴ	2.0	やや多（±～+）	1.2	0.3
アスパラガス	0	並（±）	0.1	0

② フェロモントラップによるハスモンヨトウの9月の誘殺数は、平年並（図3）。（±）

③ フェロモントラップによるオオタバコガの9月の誘殺数は、平年並（図4）。（±）

④ フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの9月の誘殺数は、平年よりやや多い（図5）。（±～+）

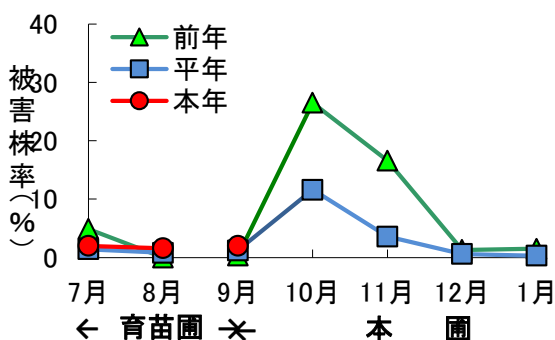


図1 チョウ目害虫によるイチゴの被害株率の推移

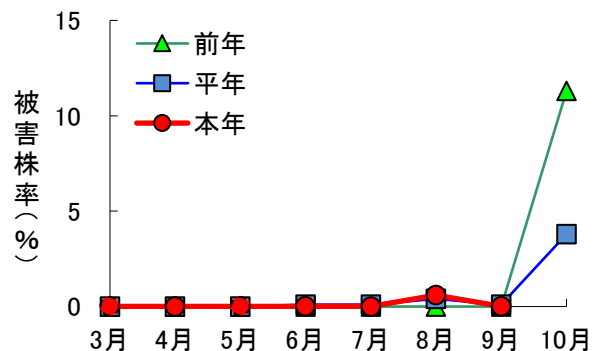


図2 チョウ目害虫によるアスパラガスの被害株率の推移

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 各園場での発生状況を確認し、若齢幼虫期の防除を徹底する。
 (2) 薬剤防除に当たっては、使用方法（収穫前日数等）を遵守し、虫体によくかかるよう丁寧に散布する。

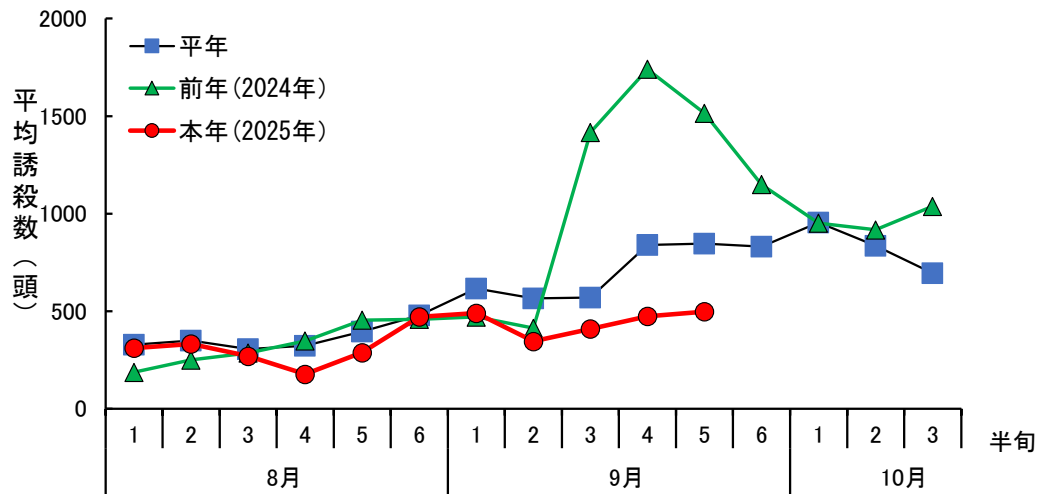
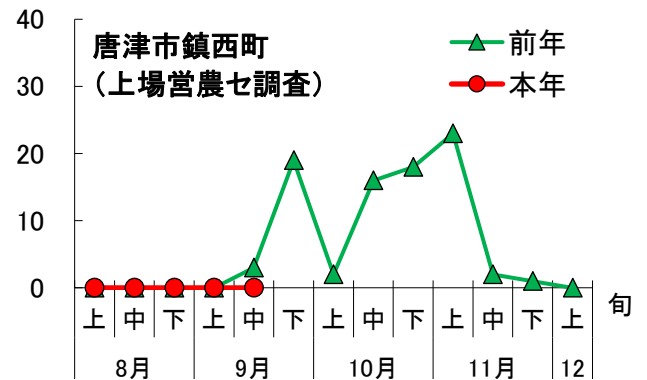
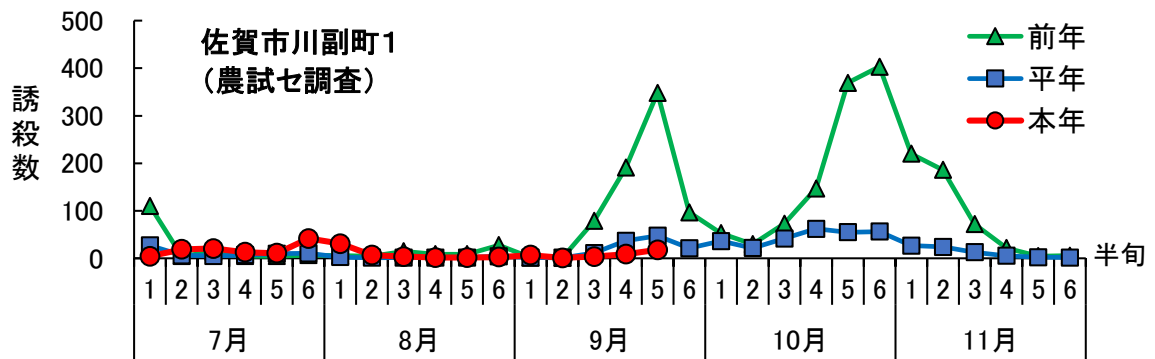


図3 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
(農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数)



※2021 年から調査を開始したため、平年値はない。

※2024 年から調査を開始したため、平年値はない。

図4 フェロモントラップによるオオタバコガ雄成虫の誘殺数
(農業試験研究センター、病害虫防除員、上場営農センター調査)

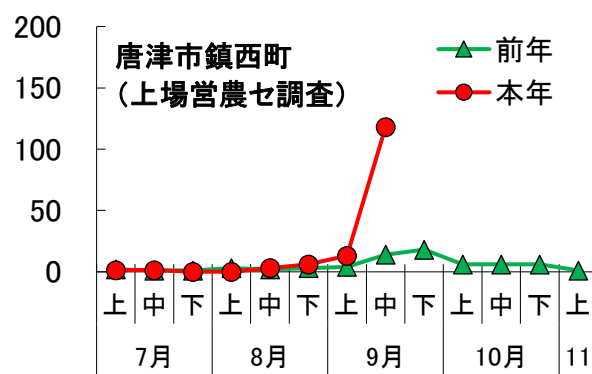
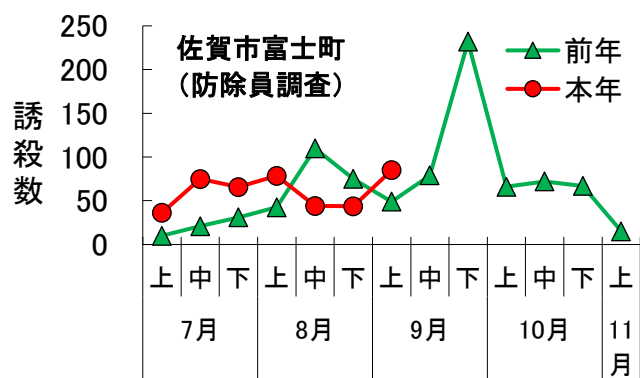
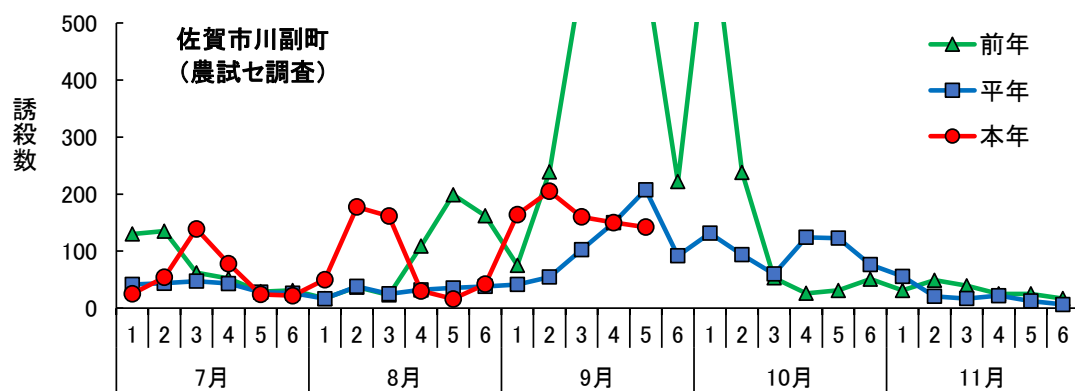


図5 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウ雄成虫の誘殺
(農業試験研究センター、病害虫防除員、上場営農センター調査)

果樹全般

[【概要に戻る】](#)

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①予察灯 (図1 参照) 平年比：多〈+〉

②フェロモントラップ (図2 参照) 平年比：並〈±〉

③ヒノキ球果における寄生数 (図3、表1 参照、9月4～8日調査)

成幼虫数平均：37.0頭 (平年14.5頭、前年7.1頭) 平年比：多〈+〉

④ヒノキ球果における口針鞘数 (図4、表1 参照、9月4～8日調査)

口針鞘数平均：18.8本/果 (平年20.1本、前年26.2本) 平年比：並〈±〉

⑤一部の地区では樹園地へ飛来しており、被害が発生している。

(4) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生量や飛来状況は地域や園によって異なるため、園内外をよく観察し、飛来が確認された場合には、直ちに防除を行う（令和7年9月11日付け病害虫発生予察注意報第2号参照）。
- (2) ツヤアオカメムシは常緑樹の樹上で越冬する習性があり、カンキツ類の樹上でも越冬する。本虫が越冬のために飛来したカンキツ樹に果実が結実している場合は、収穫時まで果実が加害されるため樹上での寄生状況を必ず確認し、確認されたら薬剤を散布する。

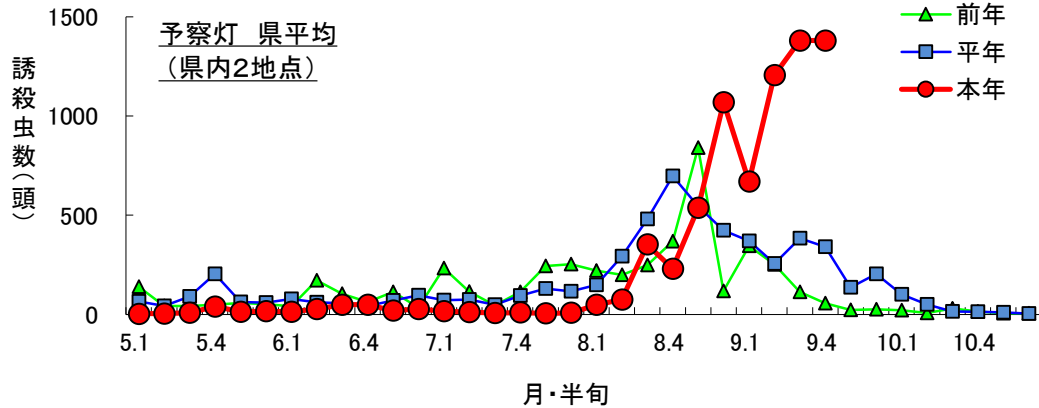


図1 予察灯（佐賀市、小城市(果樹試験場調査)）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

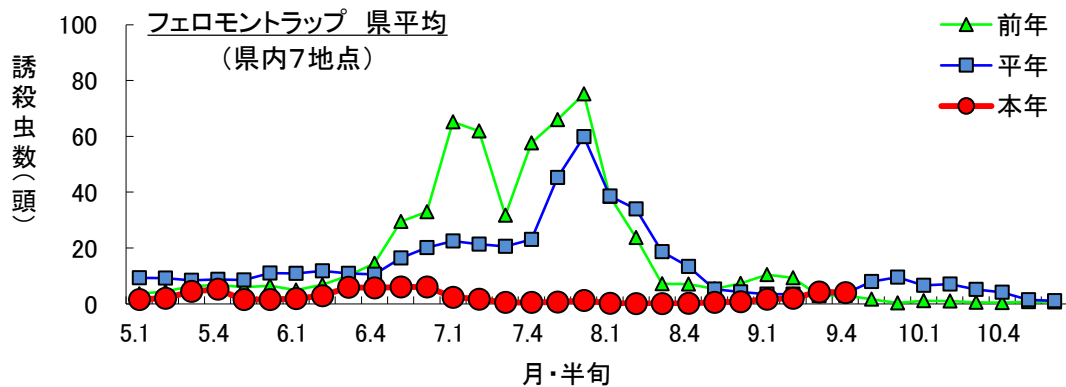


図2 フェロモントラップ（鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、基山町、太良町(病害虫防除員調査)、小城市(果樹試験場調査)、唐津市鎮西町(上場営農センター調査)）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

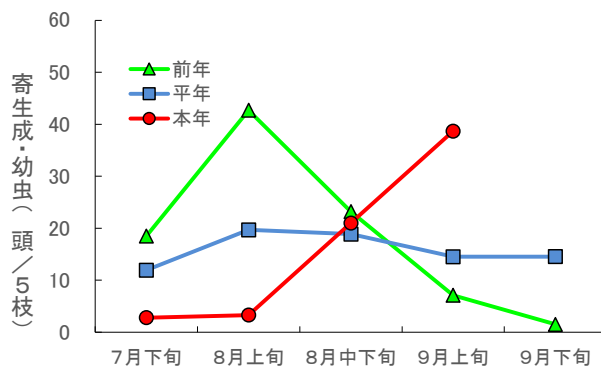


図3 ヒノキ球果における果樹カメムシ類寄生虫数の推移

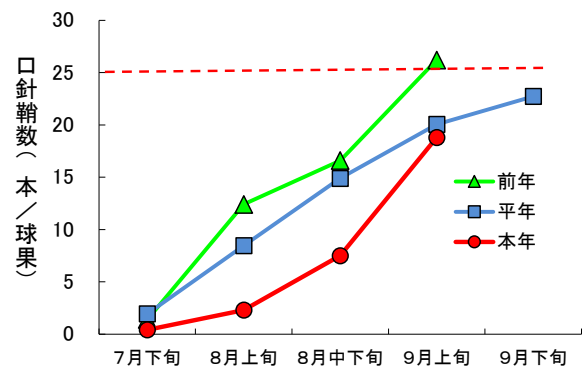


図4 果樹カメムシ類によるヒノキ球果上の口針鞘数の推移

表1 ヒノキ球果における果樹カメムシ類の寄生虫数および口針鞘数（図3、4に関する地点別の状況）

No.	調査地点	ヒノキ球果における 寄生状況 ¹⁾			ヒノキ球果における 寄生状況 ¹⁾			ヒノキ球果 ²⁾ 着果程度	口針鞘数 ³⁾			
		8月中下旬			9月上旬				7月 下旬	8月 上旬	8月 中下旬	9月 上旬
		成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計					
1	上 峰 町 堤	0	13	13	2	3	5	やや少	0.0	－	1.1	5.5
2	神 埼 市 脊 振 町 倉 谷	2	6	8	44	5	49	やや多	0.5	－	1.4	12.2
3	小 城 市 三 日 月 町 織 島	5	1	6	41	3	44	やや多	0.3	0.0	2.4	12.1
4	唐 津 市 太 良	16	2	18	34	1	35	多	0.2	0.2	5.9	8.7
5	唐 津 市 浜 玉 町 平 原	2	1	3	22	0	22	多	0.0	0.0	0.2	3.7
6	唐 津 市 北 波 多 成 淵	14	36	50	89	4	93	やや多	0.1	0.3	5.7	29.9
7	伊万里市大川町大川野	13	26	39	62	14	76	やや多	0.6	2.0	9.5	33.1
8	伊万里市南波多町原屋敷	11	26	37	22	5	27	中	0.3	0.2	9.6	19.8
9	伊万里市南波多町笠椎	5	17	22	22	2	24	中	0.0	－	7.9	16.8
10	多 久 市 南 多 久 町	13	0	13	19	2	21	中	0.9	2.7	11.5	21.0
11	鹿 島 市 古 枝	6	3	9	28	2	30	多	1.7	5.8	6.6	19.3
12	鹿 島 市 嘉 瀬 の 浦	17	6	23	14	10	24	多	0.5	7.9	25.7	28.5
13	太 良 町 江 岡	5	1	6	8	15	23	中	0.4	0.6	9.9	27.9
14	太 良 町 大 浦	19	7	26	44	1	45	多	0.4	5.3	8.7	25.7
	平 均	9.1	10.4	19.5	32.2	4.8	37.0	やや多	0.4	2.3	7.5	18.8
	平年	－	－	18.9	－	－	14.5	やや少	1.9	8.5	14.9	20.1
	前年(R6年)	－	－	23.3	－	－	7.1	少	1.4	12.4	16.6	26.2

1)たたき落としによる調査

2)ヒノキ球果着果程度：福岡農総試の達観調査法に基づいて調査

- ・極少：一部の木では上部にも球果が見られるが、多くの木では上部にも球果がない。
- ・少：球果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には球果がある
- ・やや少：球果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には球果があり、一部の木では中央部にもみられる
- ・中：中央部まで球果が見られる木が多い
- ・やや多：多くの木では中央部までたくさんの球果が見られ、一部は下部にも球果がある
- ・多：下部まで球果が見られる木が多い
- ・極多：ほとんどの木で下部までたくさんの球果が見られる

3)口針鞘数が1果当たり25本を超えるとヒノキ球果が餌として不適となりカメムシがヒノキ球果より離脱する傾向

※ヒノキ球果における寄生虫数、口針鞘数は地域等で差が大きいため、各地点の調査結果が必ずしも当該地域全体の状況を示すものではない。

カンキツ

定期調査：8圃場

調査日：9月16日～22日

[【概要に戻る】](#)

1. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：42.1%（平年2.6%、前年15.5%）

平年比：多（+）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

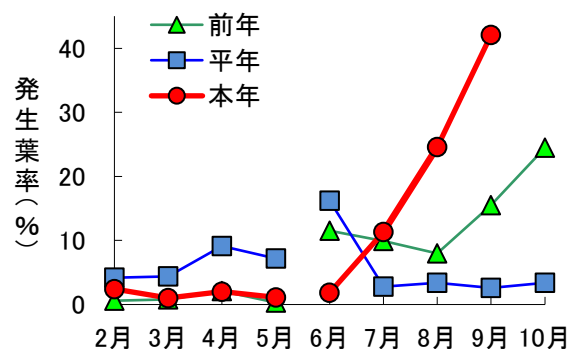


図1 カンキツ ミカンハダニの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が見られる圃場、特に収穫まで期間のある晩生品種等では低密度時からの防除を徹底する。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

キク

[【概要に戻る】](#)

定期調査 6 圃場

調査日：9月17～19日

1. アザミウマ類 (クダハアザミウマ、ミナキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生株率：11.0% (平年 5.6%、前年 0%)

平年比：やや多 (±～+)

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (+)

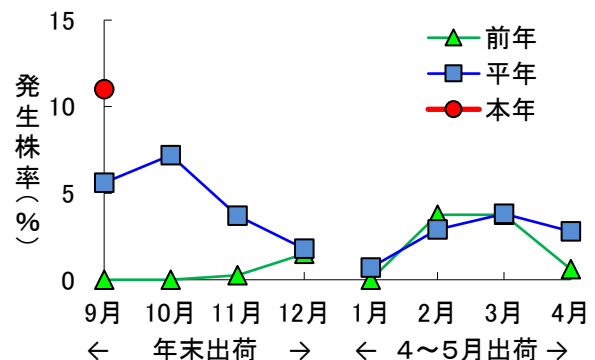


図1 アザミウマ類のキクでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 圃場周辺の雑草は発生源となるため、除草を徹底する。
- (2) 施設内の侵入を防止するために、開口部に0.4mm目以下の防虫ネットを被覆する。
- (3) 発生状況をよく確認し、低密度からの防除を徹底する。本虫は、薬剤の到達しにくい葉裏などに寄生しているため、散布むらがないよう、十分量を丁寧に散布する。
- (4) ミカンキイロアザミウマは、キクえそ病 (TSWV)・茎えそ病 (CSNV) のウイルスを媒介する。発生株を認めた場合は速やかに取り除き、媒介虫の防除を徹底する。

2. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生株率：0.3% (平年 0.2%、前年 0%)

平年比：やや多 (±～+)

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (+)

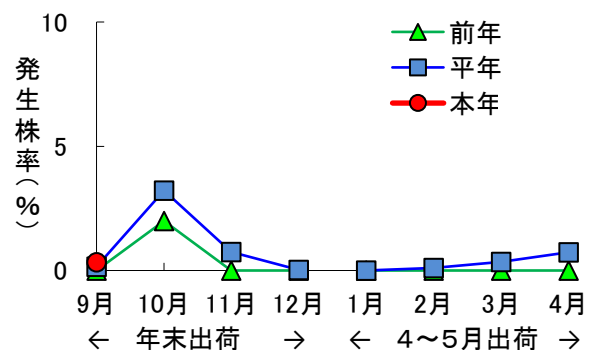


図1 アブラムシ類のキクでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査

発生株率：1.7%（平年0.7%、前年0%）

平年比：やや多（±～+）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 圃場をよく観察し、早期発見、早期防除に努める。
- (2) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

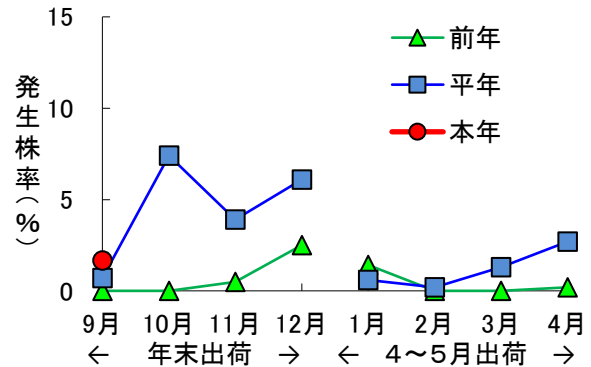


図1 ハダニ類のキクでの発生推移

4. ハモグリバエ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査(図1参照)

被害株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下葉にも薬液が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

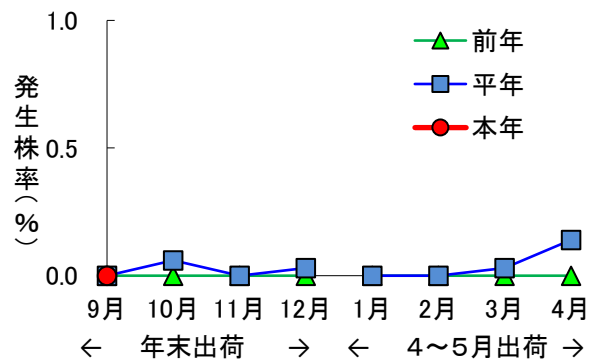


図1 ハモグリバエ類のキクでの被害株率の推移

5. チョウ目害虫

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査(図1参照)

被害株率：0%（平年0.8%、前年0%）

平年比：やや少（-～±）

②フェロモントラップによる誘殺数

野菜共通の項参照

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生程度は、圃場ごとに大きく異なるため、必ず圃場での発生状況を確認する。
- (2) 薬剤防除に当たっては、使用方法(収穫前日数等)を遵守し、虫体によくかかるよう丁寧に散布する。

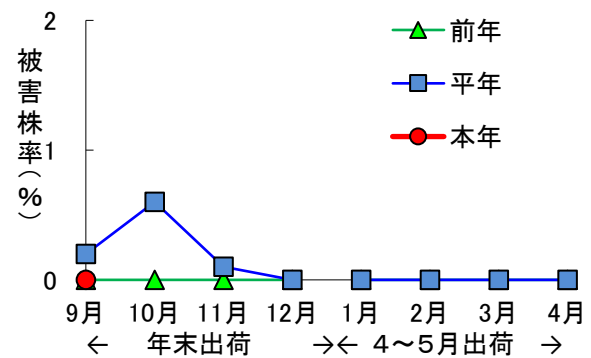


図1 チョウ目害虫によるキクでの寄生株率の推移

(3) 幼虫は、齢が進むと薬剤の防除効果が劣るため、若齢幼虫期に防除を行う。

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321899/index.html>

